

複言語コミュニティの子どもたちのキャリア発達 —PAC分析を手がかりに—

佐々木 良造・吹原 豊・助川 泰彦

1. はじめに

茨城県東茨城郡大洗町（以下、大洗町）には2021年11月時点で町の総人口のおよそ5%にあたる799人の外国人が居住している^{註1}。そのうちの半数を超え（414人）、最大の集団となっているのがインドネシア人であり、大洗町は日本国内でも有数のインドネシア人集住地として知られている。大洗町にインドネシア人が集住するようになったのは1992年からであり、現在では日系インドネシア人を中心とし、技能実習生や特定技能外国人等から成るコミュニティ（以下、大洗コミュニティ）が存在する。コミュニティの成員の中心が日系人という「身分に基づく在留資格」の所持者であることもあり、近年はインドネシアから子どもを呼び寄せたり、日本で子を産み、育てたりする事例が増加している。

筆者らは2005年から大洗コミュニティの成員を対象に、彼らの言語使用と言語習得をテーマに調査を継続している。加えて、2010年ごろより同コミュニティの子どもたちの複言語・複文化の状況や学校教育における教科学習の進展に関する調査も行っている。移民第二世代にあたる子どもたちの多くは、滞日期間の経過に伴い、日本社会において社会化されていくことになる。しかし、子どもたちのその後のキャリア発達には、義務教育段階における教科学習言語能力の問題やそれに関連した高校受験の壁、高等教育への進学か就職かという進路選択などさまざまな問題が存在する。

大洗コミュニティの子どもたちと同世代の日本人の子どもたちを分かち大きな要因の一つが、移民第一世代である親世代との間で大きな言語的文化的断絶を抱えており、キャリア発達の過程で、両親などからのサポートを得にくいことである。具体的には、移民第一世代の日本語習得やそれに伴う日本理解が極めて限定的であるため、就学初期の段階において親に宿題を見てもらうことなどが困難であるほか、塾や予備校などの学習サポート、進路に関する情報提供が適切かつ十分に受けられないことが挙げられる。また、それを踏まえたうえでの家庭内での話し合いなどにも困難を抱えている事例が多い。

本研究では、以上のような背景を持つ子どもたちの中で、高校進学を果たし、大学・専門学校を卒業しようとする段階において、どのようなキャリア発達が起きているかについての知見を得ることを目的とする。大洗コミュニティの移民第二世代では、現在その中の第一グループが社会に出始めた段階である。彼らの経験から得られたデータをもとに、続く子どもたちの支援につなげていきたいと考えている。

2. 大洗コミュニティについて

上述のように、本研究の対象者は大洗コミュニティの移民第二世代にあたる子ども

たちである。ここでは、子どもたちが属する大洗コミュニティについて見ていきたい。

大洗コミュニティの成員は、その大多数がインドネシアの中でも北スラウェシ州ミナハサ地方出身のキリスト教徒であり、主に人手不足に悩む大洗町の水産加工工場などの現場作業に従事している。Tirtosudarmo (2005) によると、彼らの生活世界を形成している基本的な組織として「家族」「同郷会」「(キリスト) 教会」「会社」があるという。筆者らの長年の観察からも大洗コミュニティは地縁・血縁・宗教(キリスト教)による結びつきが強く、相互扶助の意識が極めて高いことが確認できている。

2.1 複言語コミュニティとしての大洗コミュニティ

大洗コミュニティの特徴として、通常、複数の言語が使用されていることが挙げられる。インドネシアは多言語社会として知られているが、個人のレベルでは状況に応じて複数の言語を使用する複言語社会でもある。

大洗コミュニティの成員ほとんどの出身地であるミナハサ地方では、現在も大きく分けて数種類の地方語が使用されているほか、ミナハサ地方の共通語としてマナド語(マナド・ムラユ語 *bahasa Melayu Manado*) が広く用いられている(平林 2001)。さらに、インドネシア共和国の公用語として、また、教会での礼拝時を含む公的な場面で用いられる言語としてインドネシア語が存在する。

概観すると、現在のミナハサ地方はその中の地域性による違いはあるものの、「地方語」「マナド語」「インドネシア語」、もしくは「マナド語」「インドネシア語」の複言語社会であると言える。ミナハサ地方出身者がその多くを占める大洗コミュニティにおいても、出身地方の言語使用状況の反映が見られる。これに加え、日本語(さらには、ごくわずかであるが英語)の使用が見られることから、大洗コミュニティは複言語コミュニティであると言える。

2.2 キリスト教徒コミュニティとしての大洗コミュニティ

大洗コミュニティにおいてキリスト教会の存在は必要不可欠なものである。大洗コミュニティの成員は教会での活動を通じてアイデンティティや民族文化の再生産を行い、さらには信者や牧師の協力によって就労や生活上の問題を解決している。

教会ではインドネシア語による日曜礼拝を中心に、クリスマスやイースターなどの宗教的行事以外にもさまざまな活動が行われている。聖書の勉強会、賛美歌コーラスの練習などのほかに、現在の居住地ごとに信者の自宅などに集って行う礼拝もある。また、手料理を持ち寄って販売する食品バザー、ゲームやスポーツなどのレクリエーションや所属教会単位で催行されるツアーバスなどの観光旅行といった娯楽を提供する組織としても機能している。

2.3 移民第一世代と第二世代の言語使用と言語能力

2007年から2008年にかけて大洗コミュニティの移民第一世代を対象に行われた日本語口頭能力調査では、対象者の95%がOPI(Oral Proficiency Interview)初級レベル

にとどまっていた。また、読み書き能力に関してはさらに限定的であった。OPI で中級レベルと判定された者であっても、漢字はもとより、ひらがなや片仮名を書くことに問題があり、職場で目にする魚の名前などを目で見て認識できる程度であった。(吹原・助川 2012a)

一方、移民二世世代のバイリンガル化に関する調査(吹原・助川 2012b)、および母語保持に関する調査(助川・吹原 2013)も行われている。2010 年からの大洗コミュニティの移民二世世代を対象とした筆者らの継続的な参与観察の結果からも、二世世代の子どもたちの多くは複言語話者で、日本語が圧倒的優位のバイリンガルであり、インドネシア語とマナド語については親の言うことを聞いて理解できるという受動的なものであることも分かっている。

上記の先行研究や筆者らの観察から、大洗コミュニティにおいては個人・家族・コミュニティ単位で複言語状態であること、そして、移民第一世代と二世世代の間には、込み入った内容について十分に意見交換を行う手だてがないことが考えられる。

3. 先行研究

大洗コミュニティでは日本滞在の長期化・定住化が進んでいる。移民第一世代である親の移動に伴い渡日した子どもたちのなかには、義務教育を終えて高校に進学し、卒業後、大学へ進学する者、専門学校で学ぶ者も存在する。そして、2022 年 4 月には大学・専門学校を卒業し社会に出る者も存在する。しかし、奥山(2018)によると「職業選択を視野に入れた進学指導やキャリア形成についての実践報告はまだ少ない」という。

田巻・Sueyoshi(2014)は、出稼ぎ目的で来日したペルー人の子どものうち、日本で成長し大人になった若者 16 名の成長過程に焦点を当て、調査を行っている。彼らの日本での生活に対する「満足度」は総体的に高く、彼らの人生を支えてきた最も大きな要因は「家族」の存在で、特に重要な役割を果たしたのは母だったという。また、最終学歴(中卒・高校中退・高卒・専門学校または大卒)別の雇用形態(非正規・正規)は半々で、学歴があれば正規雇用の職に就けるわけではないことを示している。

奥山(2018)は、非漢字圏出身(フィリピン 3 名、タイ 1 名)で来日時に全く日本語の知識がなく、高校卒業後、専門学校・短大・大学で教育を受けた元外国人児童生徒を対象として、時系列に沿った半構造化面接を実施し、TEM(Trajectory Equifinality Model、複線経路等至性モデル)を用いて分析した。その結果、理解ある親、身近な日本人の親しい友だち、進学に関する情報を持つ担任教師という 3 者の支援を受けたことが、学校生活での困難を乗り越えた要因であったと報告している。換言すれば、志水(2014)で言う「つながり」、すなわち社会関係資本を活用していたとも言えよう。

そして、今井(2008)は大阪府内の高校に通うニューカマー 57 名の生徒を対象に行ったインタビューから、彼らの将来展望を以下の 5 つに分類している。

- (1) 大学や専門学校へとりあえず進学する「とりあえず進学」型
- (2) 日本語と母語を使い、両国に関係した仕事を目指す「架け橋」型

- (3) 日本にも母国にも固執せず、世界を舞台とする国際的な仕事を志向し英語を重要視する「国際」型
- (4) 言語をいかすことに執着せず、小さい頃から抱き続けている夢や、進路指導によって方向づけられ形成された「手に職」型
- (5) 将来の希望職業や展望をもっている（いた）が、それを断念してしまう状況にある「現実直面」型

今井（2008）の類型化は、外国にルーツをもつ子どもたちの将来展望を考える上で有益であると考えられる。

田巻・Sueyoshi（2014）は日本で成長した若者 16 名を、奥山（2018）は高校卒業後、学び手から働き手となった元外国人児童生徒を、今井（2008）は現役の高校生を調査対象としている。本研究では大学・専門学校を卒業する時点での調査を分析の対象としている。筆者らは調査対象者およびその親が来日した時から面識があり、長期にわたって調査・観察を続けているため、彼らの発達過程を知り得る関係にある。

本研究も彼らのライフ・ステージに寄り添う長期間の調査・観察の一部であることから、「キャリア」をワーク・キャリアに限定することなく、『人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね』の総体（文部科学省 2011）として考える。そして、「キャリア発達」を『自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程』が『キャリア発達』である。具体的には、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（文部科学省 2011）とする。

4. 調査方法ならびに調査協力者

義務教育終了後のキャリア発達（進路選択・就職等）は個々人で異なり、家族の期待や本人の将来像も一様ではない。また、調査実施者による誘導や予断が入らぬよう、個々の経験を調査協力者に話してもらうためには、調査実施者の関与を最小限に留め、調査協力者自身の振り返りが促される手続きが望ましい。また、キャリア発達のような、ふだん意識していない潜在的な部分を浮かび上がらせようとする、調査協力者自身の論理的思考では困難を伴うことがある。

このような場合、非論理的な自由連想からはじめて、類似度を考えさせ、それを用いたクラスター分析の結果を調査協力者と調査実施者が共有するという方法が有効な場合がある（土田 2017）。

個々で異なる経験について、調査実施者の予断なく調査協力者に語ってもらうため、本研究では内藤（1997）によって開発された PAC（Personal Attitude Construction, 個人別態度構造）分析を用いる。

4.1 PAC 分析の手続き

PAC 分析の手続きは以下の通りである（内藤 1997）。

- a. 当該テーマ（連想刺激文）に関する自由連想

- b. 連想項目間の類似度評定
- c. 非類似度距離行列によるクラスター分析
- d. 調査協力者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告
- e. 調査実施者による総合的解釈

田巻・Sueyoshi (2014) や奥山 (2018) で述べられているように、キャリア発達を支援した重要人物が想定される。本研究でも「キャリア発達の支援」に注目し、テーマ (連想刺激文) を以下のように設定した。

あなたの進学・就職が決まるまで、いつ、だれが、どんなサポートをしてくださいましたか。家族、まわりのインドネシアの人々、学校の友達、先生など、あなたの進学・就職をサポートしてくれた人が、どんなとき、どんなことをサポートしてくださいましたか。お金や物だけでなく、話してくれたこと (言葉)、精神的な支えとなったことなど、思い浮かんだ印象や言葉を、思い浮かんだ順に入力してください。

手続きの a. から c. は、土田 (2017) が作成し、Microsoft Windows の Excel 上で動作する PAC 分析支援ソフト「PAC-assist2」(ver. 20160330) を利用した。「PAC-assist2」の画面の指示に従い、調査協力者が自由に連想したことを入力し、連想項目間の類似度評定を 10 段階で行った。なお、類似度評定は 1 回のみで、「連想項目 A—連想項目 B」の類似度のみを評価し、左右を入れ替えた「連想項目 B—連想項目 A」の類似度評価は行っていない。

「PAC-assist2」によって生成された非類似度行列から、統計分析ソフト R (ver. 4.1.1) で「c. 非類似度距離行列によるクラスター分析」を行い、デンドログラム (樹形図) を作成した。

PAC 分析の手続きは第一筆者が担当し、調査協力者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告は第三筆者が対応した。第一筆者と第二筆者は補足質問がある場合のみ発言した。

4.2 調査協力者について

調査協力者は表 1 の 3 名である。大洗コミュニティの移民第二世代の子どもたちのうち、大学または専門学校をまもなく卒業し、就職して社会の一員となる者 3 名を調査対象とした。調査協力者に調査の趣旨を説明し、研究参加について同意を求めたところ、3 名中 3 名から同意を得た。

調査協力者のうち、A は調理や食品加工の勉強ができることに魅力を感じて実業高校に進学した。高校進学当初は大学進学を意識しておらず、3 年次に進級したタイミングで大学への進学を決意した。B は子どもの頃から旅客機の客室乗務員に憧れており、高校進学の段階でも大学進学に有利な普通高校を選んだ。C は来日が小学 5 年次であったことも影響してか、日本での教科学習に困難を抱えながら、高校進学時には実業高校に進んだ。漢字を含む読み書きが苦手であり、インドネシアで美容室を営ん

表 1 調査協力者の学歴と調査時の進路状況

	高校	高校卒業後	調査時 (2021年10月)
調査協力者 A	実業科	私立大学進学 (英文科)	2022年3月卒業予定 就職活動中・内定あり
調査協力者 B	普通科	1浪後、専門学校進学 (IT関連・外国語)	2022年3月卒業予定 就職活動中
調査協力者 C	実業科	専門学校進学 (美容師養成)	2022年3月卒業予定 内定あり

でいた祖母の影響もあって美容師を志すようになった。

5. PAC 分析の結果と解釈

調査対象者3名のデンドログラムを提示し、その解釈を試みる。以下、連想項目あるいはその一部をブラケット ([]) で示し、クラスターの名前あるいはその一部を墨付き括弧 (【 】) で示す。また、調査協力者による連想項目の説明やインタビューとのやりとりで調査協力者が語ったことを鍵括弧 (「 」) で示した。なお、鍵括弧あるいはブラケットの中の小括弧 (()) は、筆者による補足、あるいは誤用と思われる部分の修正を示す。

デンドログラム内の連想項目に付した数字は重要度を表し、「+・-・±0」の記号はそれぞれ、連想項目に対するプラスのイメージ・マイナスのイメージ・どちらでもないイメージであることを示す。プラスのイメージとは「そのことを考えると、うれしい、あるいはポジティブな気持ちになれること」と説明し、マイナスのイメージは「プラスの逆」、±0のイメージは「プラスのイメージ、マイナスのイメージのどちらでもないこと」と説明した。

以下、調査協力者による連想項目の説明および調査実施者とのやりとりから、第一筆者が3名分、全てのクラスターに名前を付けた。クラスター間の比較と補足質問については、紙幅の都合上、クラスターの解釈や命名に関する部分のみを記した。

なお、総合的な解釈にあたっては、筆者らがこれまでのフィールドワークで知り得たことを加えて記述する。

5.1 調査協力者 A の結果

図1に調査協力者 A のデンドログラムを示す。PAC 分析の手続き a.から c.に従ってデンドログラムを作成し、調査協力者 A に距離 160 付近の3クラスター分割案を提示したところ、了承された。

5.1.1 調査協力者 A によるクラスターの解釈

クラスター1は、[家族がお祈りをしてくれた] という連想項目が1つのクラスター

となっている。「お祈り」は教会で行われる礼拝と、家での礼拝の両方を指しているという。

クラスター1の「家族」は「親戚とか、まあ、そこまで距離が近くない人たちも含めての家族」だと言っている。この「家族」はいわゆる血縁者のみを指すものではなく、血縁、地縁、宗教に基づくコミュニティを指していると考えられる。また、「お祈り」という宗教的な行為がAの支えとなっていたことから、クラスター1を【コミュニティによる宗教的な支え】と名付けた。

クラスター2は2つの連想項目「友だちが面接練習を手伝ってくれた」と「友だちが求人と一緒に探してくれた」がクラスターをなしている。

クラスター2単独のイメージは「就職活動のことが思い浮かび」、「ほとんどがオンラインで面接も済ませる」という新型コロナウイルスの感染が拡大する中での就職活動をイメージしている。他方、クラスター間の比較で、クラスター2とクラスター3を比較して「1人じゃできないことだった」、「周りに支えられている」と感じているという。こうしたAの語りから、クラスター2を【就職活動時の友人の支え】と名付けた。クラスター3は「家族に色々な教材を買ってもらった」、「友だちが勉強を教えてくださいました」、「友だちが自己分析を手伝ってくれた」という3つの連想項目が1つのクラスターを成している。

連想刺激文が「進学についてのことだったんで」、「勉強していることがすごいイメー

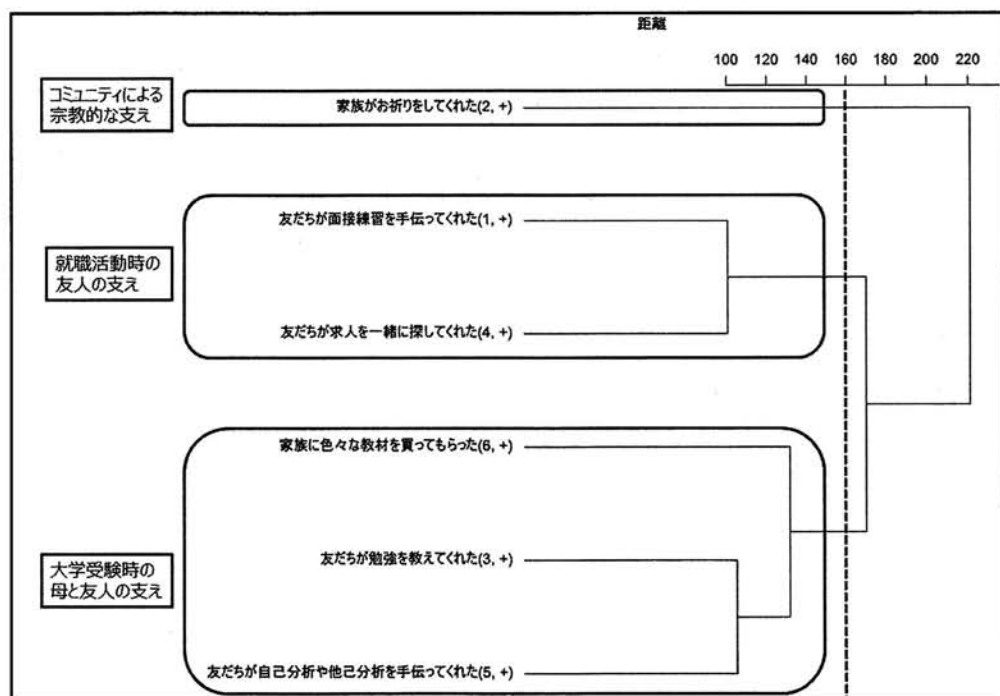


図1 調査協力者Aのデンドログラム

ジされました」という。A は県内の実業高校から四年制大学への進学を目指した。その際、高校の推薦を受けて進学することを考えており「それ（高校の推薦基準）を満たすためにすごい猛勉強してたのを思い出し」、「とりあえず必死、必死だったとき」を連想したという。

クラスター1でも「家族」に言及しており、クラスター3でも「家族」という言葉を使っているが、クラスター3の「家族」は具体的に言うと「お母さん」だという。

クラスター3 は大学進学に向けて必死に勉強しているとき、母と友人に支えられたことが表れていると考え、【大学受験時の母と友人の支え】と名付けた。

5.1.2 調査協力者Aによるデンドログラム全体のイメージの報告

デンドログラム全体のイメージは「全部友だちと家族って書いてるんで、友だちと家族ですごい支えられてるんだな」、「もっと感謝しないとなあっていう気持ちになりますね」と述べている。一方、「どれも何とかしてもらっているみたいな感じ」で、「あんまりちゃんと成長できてないのかなあ、力不足なのかなあ」と思ったという。

5.1.3 調査実施者による総合的解釈

調査協力者A は、県内の実業高校から四年制大学への進学を果たしている。進学にあたっては、高校からの推薦を受けており、校内での推薦を受けるために「(高校の)友だちが勉強を教えてくれた」り、「自己分析や他己分析を手伝ってくれた」りした。そして、大学4年次の就職活動(調査時)にあたっては、「(大学の)友だちが面接練習を手伝ってくれ」たり、「求人と一緒に探してくれ」た。進学・就職時、日本人の友人からのサポートが、Aのキャリア発達に大きく寄与していることが考えられる。

もう一つのサポート要因として「家族」が存在する。大学進学時には「家族(母)に色々な教材を買ってもらった」り、「家族(宗教的なコミュニティ)がお祈りしてくれた」りした。

母からは「お祈り」という宗教的な精神面でのサポートと「教材を買ってもらった」という物質的なサポートとが想起されている。

精神面でのサポートの理由として考えられるのは、Aの母親の日本語能力がOPIで初級中レベルと極めて限定的であることから、日本での進学や就職についてAは母親から具体的な助言を得ることが期待できなかったことが考えられる。

また、物質的なサポートが想起されている理由としては、重い持病がある母との二人暮らしで経済的な余裕がない中、「教材を買ってもらった」という経済的な負担をかけたことが想起されたのではないかと考えられる。

友人、家族以外では、「わたし的には、キャリアセン(キャリアサポートセンター、就職支援課)の方たちは、その就活とか、めっちゃめっちゃ向こうから積極的に連絡とかしてくれて結構助かった」と述べている。

友人関係については、小中学校、高校、大学それぞれの段階で仲の良かった友だちとの関係を維持している。しかし「日本人の友だちだと(中略)キリスト教というの

は何だろう、よくわからないっていう子の方が多いので、そういうお話をできない」が、大洗コミュニティの同世代の友人は「日本人の友だちと同じようなことでも支えてくれるし、それプラス、キリスト教のお祈りだとか、相談相手がいるというところでも支えられている」と述べており、友人と宗教がキャリア発達に大きく寄与していると考えられる。

5.2 調査協力者Bの結果

図2に調査協力者Bのデンドログラムを示す。PAC分析の手続き a.から c.に従ってデンドログラムを作成し、調査協力者Bに距離80付近の4クラスター分割案と、距離110付近の5クラスター分割案を提示したところ、5クラスターの分け方のほうが「じっくり来る」とのことだった。クラスターの分割にあたっては、調査協力者の意見を尊重し、5クラスターとした。

4クラスター分割案と5クラスター分割案の違いは「始める前に諦めちゃいけない。」と「あなたが行ってきたことは、必ずちゃんとかえってくる。」が2つの連想項目で1つのクラスターになるか、2つの連想項目それぞれがクラスターを形成するかの違いであった。後の報告で「始める前に諦めちゃいけない。」は「父の言葉」で、「あなた

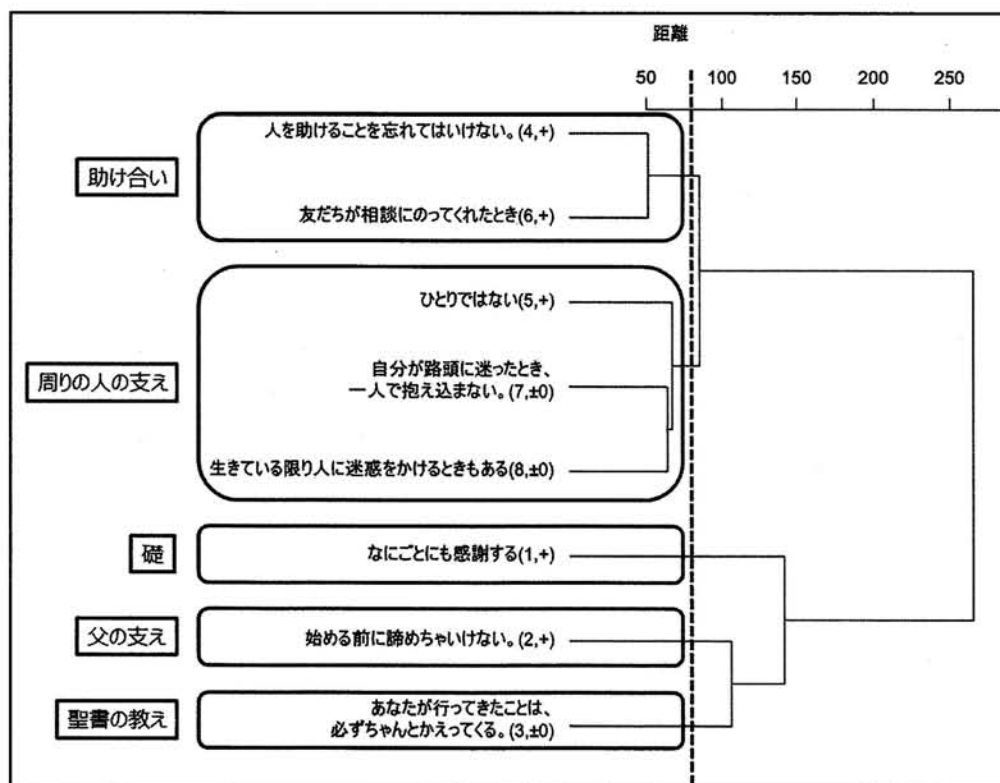


図2 調査協力者Bのデンドログラム

が行ってきたことは、必ずちゃんとかえってくる。]は「聖書の言葉」と述べていることから、Bが5クラスター分割案を採用したと考えられる。

5.2.1 調査協力者Bによるクラスターの解釈

クラスター1の「人を助けることを忘れてはいけない」は、「(Bの)おばあちゃんの教え」で、「人からの助けを大事にしろと言われてきた」と述べている。「人を助けることを忘れてはいけない」と「友だちが相談にのってくれたとき」の2つがクラスターとしてまとまっているのは、「人助け」であり、「私が友だちにお願いして、反対に友だちが私にお願いするという、なんかこう、人助けの関係」で、「くれる、してあげる」関係だという。以上のBの報告から、クラスター1を【助け合い】と名付けた。

クラスター2の3つの連想項目「ひとりではない」(ママ)、「自分が路頭に迷ったとき、一人で抱え込まない。」(ママ)、「生きている限り人に迷惑をかけるときもある」は「自分の経験から学んだこと」であるという。「ひとりではない」のは「誰かと一緒にいるからこそ、今、生きていられる」からで、「生きている限り人に迷惑をかけるときもある」のは「本で読んでた」ことだという。

「振り返れば、本当にいろんな人に迷惑をかけ、「いろんな人に助けを求めた」と述べている。この語りは「自分が路頭に迷ったとき、一人で抱え込まない。」という連想項目を指すと考えられる。

「そして、自分の今があるなっているのがこの2グループ」と報告している。以上の報告から、クラスター2を【周りの人の支え】と名付けた。

クラスター3は、1つの連想項目「なにごとにも感謝する」から成っている。「なにごとにも感謝する」のも祖母の教えであり、感謝しないと「人を妬んだりやっぱり悪い方向に行くということをやっぱり頃からずっと教わってて」、これは「自分のモットーみたい」だと述べている。そして、「何事にも感謝する、たぶん、これを基盤としてるのかなと思います」とも述べていることから、クラスター3を【礎】(いしずえ)と名付けた。

クラスター4の連想項目は「始める前に諦めちゃいけない。」の1つのみで、これは父の言葉だという。怖がり緊張しがちなBに「道があるんだったらそこに突き進みなさい」と言っていたという。Bは高校卒業時の進路を「今まで自分、本当に英語か文学しかなかった」と考えていたが、現在は「プログラム書いたりWebサイトを作ることもできたのは、やっぱりお父さんの言葉があったから」だという。こうした語りから、クラスター4を【父の支え】と名付けた。

クラスター5は、連想項目「あなたが行ってきたことは、必ずちゃんとかえってくる。」の1項目から成っている。これは「聖書の言葉」だという。「人助けとか通訳をした中で、その経験が今の就職につながったなと思いますし」、就職活動の面接で「バックグラウンドにひかれた」という評価を得たことから、「やっぱり自分が今まで経験したことを、行ってきたことは、直接ではないけれども何かしらでかえってくる」と

報告している。こうした語りから、クラスター5を【聖書の教え】と名付けた。

5.2.2 調査協力者Bによるデンドログラム全体のイメージの報告

デンドログラム全体を見て湧いてくるイメージは「人生に上と下がある」ことだという。上は「楽しい、嬉しいとき」で「マイナスのとき」もあり、「その経験があったからこそ、今の自分ができあがっていると思います」と述べている。

5.2.3 調査協力者Bへの補足質問

友人関係について尋ねたところ、小さい頃から一緒にいる大洗コミュニティの同世代の友だちが「すごい支えになり」、「同じ環境で生活しているので、自分がどう感じたか、どういう悩みがあるとかわかってくれた、理解してくれる人たちがいたことにすごい感謝して」いるという。また、「そういう友だちがいなかったら、(ITと外国語を学ぶ) 専門学校に行くことさえ、たぶん、嫌だって思ってた」と述べており、「(同世代の大洗コミュニティの友人からの) 励ましの言葉がなかったら、たぶん、そこで諦めた。(中略) 同じ環境にいた人がいたからこそ、自分、頑張れたんだなと思います」とも述べている。

日本人の友だちについては「親が日本人なんで(中略) 相談しても理解しがたいところがある」と感じており、「日本とインドネシアを比べられることができる環境の友だちはすごい大事だ」と述べている。

また、特に専門学校の教員から、折に触れてアドバイスを受けて、英語試験の監督補助を任されたりしたことが「私の能力を理解してる先生」で、Bのバックグラウンドについても「いい環境だね」と肯定的な評価を受けたという。

5.2.4 調査実施者による総合的解釈

Bはクラスター5の【聖書の教え】に表れているように、キリスト教徒として信仰心が篤く、「なにごとにも感謝する」というクラスターが【礎】であり、【助け合い】の精神に富んでいる。筆者らの観察した範囲でも、教会のなか礼拝時の通訳を務めたりしたり、教会に来る子どもたちの世話をしたりしている。「なにごとにも感謝する」という言葉が祖母の言葉であるように、信仰心の篤い祖父母の影響が大きい。

キャリア発達に目を向けると、クラスター2の【周りの人の支え】は、高校卒業時に大学入学を果たせず、自宅で進学に備えていた時期を反映しており、いわゆる「宅浪」をしていた時期だった。この時期は「感謝できる状況ではな」く、「やっぱり辛い思いしかできなかった」という。

Bの根底には「なにごとにも感謝」し、【助け合い】という信仰心があると考えられる。大洗コミュニティのなかで【周りの人の支え】を受け、同世代の友だちが「すごい支えになり」、「英語と文学しかなかった」Bが、「お父さんの言葉があったから」ITと外国語を学ぶ専門学校で学び続けることができたと考えられる。

上述のように、Bは、地縁・血縁・宗教的コミュニティからのサポート、特に同世

代のインドネシア人の子どもたちの支え、そしてBのバックグラウンドに肯定的な理解を示す専門学校の教員の支えがキャリア発達を促進したと考えられる。

5.3 調査協力者Cの結果

図3に調査協力者Cのデンドログラムを示す。PAC分析の手続きaからcに従ってデンドログラムを作成し、調査協力者Cに距離120付近の3クラスター分割案を提示したところ、了承された。

5.3.1 調査協力者Cによるクラスターの解釈

クラスター1は「励ましてくれたり、弟には将来どんな美容師になりたいとかちゃんと想像して（想像して）選んでって言ってくれました」、[自分が辛い時]の2つの連想項目が1つのクラスターを成している。

クラスター1は「自分が何か落ち込んだりとか、それを、弟が励ましてくれたりとか、何かいろんな言葉を伝えてくれたり」するイメージで、「弟からのサポート」というまとまりだという。以上のCの語りからクラスター1を【弟の励まし】と名付けた。

クラスター2は「何も決められない時」という1つの連想項目が1つのクラスターとなっている。「学校でやっぱり大事なことに直面したとき何もきめられない」ときで、「学校の先生とか学校の友だちとか」からサポートを受けている。しかし「相談した

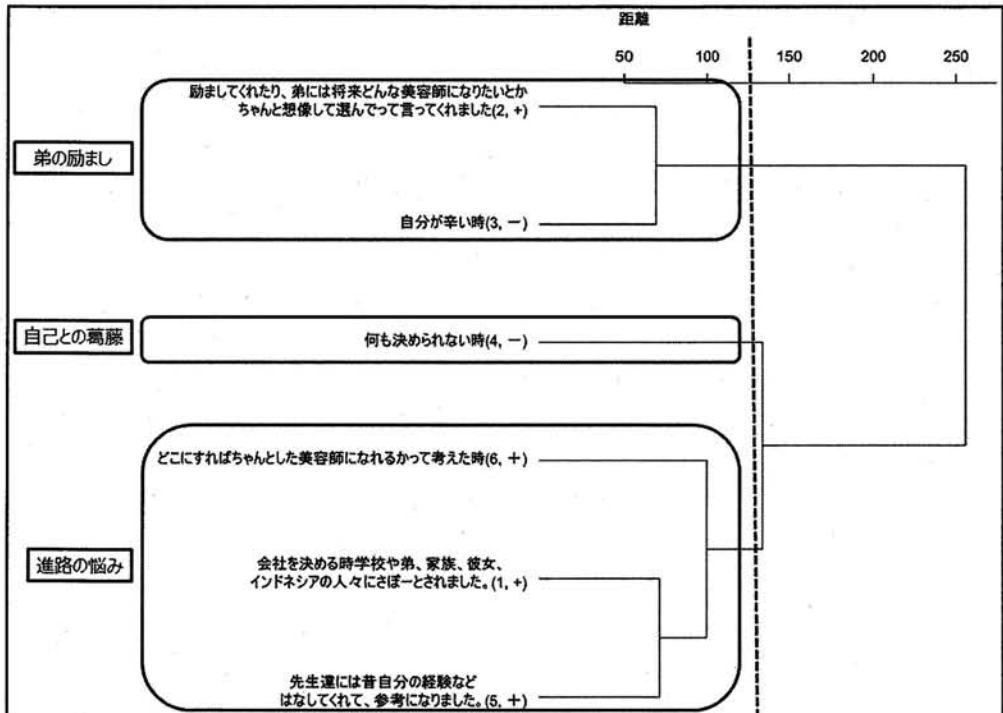


図3 調査協力者Cのデンドログラム

ら（中略）これどうかな、とか、こうしたらいいんじゃないかな」というサジェスションを受けただけで、具体的なアドバイスは受けられなかったという。こうしたCの語りから、クラスター2を【自己との葛藤】と呼ぶことにする。

クラスター3は「どうすればちゃんとした美容師になれるかって考えた時」、[会社を決める時学校や弟、家族、彼女、インドネシアの人々にさぼーと（サポート）されました。]、[先生達には昔自分（昔の自分）の体験など話してくれて、参考になりました。]の3つの連想項目から1つのクラスターが形成されている。

Cは美容師になるために実業高校から専門学校へ進んだ。そのとき思い浮かぶのは「(高校の)担任の先生」で、[自分(高校の先生自身)の経験など話してくれ]たという。そしてC自身が「もっと先のことを考え」たという。そして[会社を決める時]は[学校や弟、家族、彼女、インドネシアの人々にさぼーと（サポート）され]たという。

このように高校から専門学校、専門学校から就職という進路選択に際し、悩んでいた様子がうかがえる。こうしたCの語りからクラスター3を【進路の悩み】と呼ぶこととする。

5.3.2 調査協力者Cによるデンドログラム全体のイメージの報告

全体のイメージとしては「悩んだときにちゃんと相談に乗ってくれる人がいて、意見も出したりとか叱ってくれる人もいて、恵まれている」という。

5.3.3 調査協力者Cへの補足質問

Cの弟は牧師を目指して大学の神学部で学んでいる。Cにとって弟はどのような存在かたずねたところ「前までは本当に子どもだったんですけど、今はもうすごい自分のためにちゃんと説教を飛ばしてくれたり（中略）して、逆にあっちが兄みみたいな感じ」になっており、「自分の中で一番輝いている存在」だという。

また、両親からのサポートについてたずねたところ、「お父さんとお母さんはやっぱり日本に長くいたんですけど、やっぱり学校とか、日本風の普通の伝統文化とかわからないので、インドネシアのほうを伝えちゃうんですよね。でもインドネシアのほう、まねしちゃうと、結果的にうまくいかない」という。そして「やっぱ、なんかもう、そういうところはちょっと無視しちゃう。たまにあるんですね。無視して、こっちのやり方をやる」。そして親の話は聞くが「結局最終的には自分が決めることになっちゃう」と述べている。

Cが高校生のとき、「お母さんは美容師にはなってほしくなかった。だけど、自分ですっと美容師になりたいと言ったら、応援してくれ」るようになったという。しかし、「(Cは)話を聞いてほしいのに、お母さんは自分の話しかしないんです。人の話は聞かないで、自分の話は聞いてほしい」という母に「聞いて」と言えなかったと述べている。

5.3.4 調査実施者による総合的解釈

Cは高校生の時から美容師になりたいと言っていたが、母親に反対されていた。そして、美容師になることに母親の理解がなかなか得られず、Cは「(母に)話を聞いてほしいのに、お母さんは自分の話しかしない」状況が続いた。このように「自分が辛い時」、励ましてくれたのは弟だった。

高校から美容師の専門学校へ進むとき、「先生達には昔自分(昔の自分)の体験などはなして(話して)」もらい、専門学校を卒業して就職するときは「学校や弟、家族、彼女、インドネシアの人々にさぼ一とされ」たという。こうした状況は「悩んだときにちゃんと相談に乗ってくれる人がいて(中略)恵まれている」と感じている。

両親は「日本風の普通の伝統文化とかわからないので、インドネシアの方を伝えてしまい」、「結果的にうまくいかない」。そして「最終的には自分が決めることになつてしまうものの、[何も決められない時]、弟の励ましを受けた。

他方、「学校の先生とか友だちとか」に意見を求めるものの具体的なアドバイスは受けられず、自分のことを自分で決められない自分にもどかしさを感じている様子がうかがえた。

6. 総合的考察

調査協力者の3名には、キャリア発達の重要な局面のひとつである卒業から就職の過程において、共通してキリスト教コミュニティ内部での扶助があることが分かった。それは、保護者からの助言であったり、友人からの支えであったり、聖書の言葉であったりするが、キリスト教徒であることにより受けられたサポートを共通して得ている。冒頭で述べたように宗教によるつながりが、コミュニティの子どもの就職という人生のステージで重要な役割を果たしていることがわかった。

6.1 複言語コミュニティにおけるキャリア発達と家族の問題

2.3で述べたように、大洗コミュニティは、個人・家族・コミュニティ単位で複言語状態であるものの、移民第一世代の優位言語はインドネシア語またはマナド語であり、第二世代の優位言語は日本語という違いがある。

こうした複言語コミュニティで生じる典型的な問題が、調査協力者Cの語りに見られる。Cは「(母に)話を聞いてほしいのに、お母さんは自分の話しかしないんです。人の話は聞かない」と言っている。この状況を言語的な側面から考察してみる。

Cの両親は労働者として来日し、日本語能力はOPIの初級レベルで複雑なコミュニケーションは行えない。一方、Cは小学校高学年のときに呼び寄せられて来日しているため、自身の将来の希望を親に伝えるだけのインドネシア語能力はなく、日本語で話したとしても両親は日本語が理解できない。こうしたギャップが【自分との葛藤】を生み、【自分が辛い時】に【弟からの励まし】を受け、「美容師になりたい」と言い続け自らの意志の強さを示すことでしかC自身の将来の希望伝えることができなかったのではないだろうか。一方、田巻・Sueyoshi (2014)、奥山 (2018) で述べられてい

るように、移民第二世代の子どもたちを支える大きな要因は「家族」、特に母親であり、学校生活での困難を乗り越えるには理解ある親の支援が欠かせないことから考えると、Cにとって、母との間に存在する言語の障壁は想像を絶するものだったに違いない。

では、調査協力者 A・B の場合はどうだろうか。複言語コミュニティにおける言語の障壁の問題はなかったと言えるだろうか。両者とも精神的な支えとして家族の存在を挙げている。連想項目や語りからは「理解ある親」のように見えるが、移民第一世代である親の優位言語がインドネシア語であり、日本語能力は OPI 判定で初級であることから、日本でのキャリア発達に益する情報を日本語で得ることができないため、子どもに適切なアドバイスをしたり、意見を交わしたりすることができなかつた可能性が高い。

このように、移民第一世代とその子どもである移民第二世代との間には、複言語コミュニティにおける言語の障壁の問題が存在する。

6.2 友人と教育関係者によるキャリア発達へのサポート

移民第二世代の子どもにとって、キャリア発達に関わる現実問題のサポートは、親だけでなく、「友だち」である。奥山 (2018) でも「身近な日本人の親しい友だち」が支援の役割を担っていると述べられているが、大洗コミュニティの場合、「身近な日本人の親しい友だち」より、大洗コミュニティの同世代の子ども同士で支え合っている様子がうかがえる。その理由として A は、日本人の友だちについて「キリスト教というのは何だろう、よくわからないって言う子の方が多いので、そういうお話をできない」と述べており、B も同様であった。こうしたことから、「日本人の友だち」より宗教的価値観を共有する同世代の子ども同士のつながりを重要視していることが考えられる。

奥山 (2018) では「進学に関する情報を持つ担任教師」が重要な支援者であるという。その理由は、高校進学にあたって外国人が利用できる制度に詳しいことである。茨城県では外国人生徒を対象とした入試制度は滞日 3 年以内となっている (茨城県教育委員会 2021)。今回の調査の場合、3 名とも滞日期間が長く、外国人を対象とした入試制度を利用することができず、一般入試で高校に入学している。そのため、奥山 (2018) のような教員の存在は連想項目に現れず、C の「(担任教師自身の) 経験などを話してくれ」たことのみとなっている。

こうした背景には日本の学校教育における進路指導の理念が関係していると考えられる。中條 (2017) によると、学校における進路指導は「児童・生徒が (中略) 主体的に自分自身の進路を選択するというプロセス全般を指導、援助するもの」であることを理念としているという。

C は担任から自身の進路を方向づけるようなアドバイスを期待していたかもしれないが、「こうすれば、とかじゃなくて、なんか、こうしたらいいんじゃないの」という中立的なアドバイス受けるにとどまり、自己決定を委ねられ悩んでいたと考えられる。

教育関係者からのキャリア発達への支援として、Aは大学の「キャリセン」から、Bは専門学校教員からの支援について述べている。奥山（2018）の高校進学段階ではないものの、キャリア発達段階でAは大学の就職支援、Bは専門学校の担任と教育関係者からの支援を受けていた。したがって、調査協力者3名のキャリアは教育関係者から何らかの支援を受けたと言える。このようにそれぞれの社会関係資本を活かし、キャリア発達を遂げている。

そして、友人関係もキャリア発達に資していることが分かった。大洗コミュニティの子どもたちの友人関係は社会関係資本と捉えることもできるが、子どもたちのつながりはキリスト教という宗教にも基づいていることから、家庭の文化資本とも考えられる。

6.3 高校時の将来展望と今後のキャリア発達

今井（2008）の5類型を本研究の調査協力者3名に当てはめてみる。

Aは、日本にも母国にも固執せず、世界を舞台とする国際的な仕事を志向し英語を重要視する「国際」型として四年制大学に進学した。就職活動初期の第一志望は、旅客機の客室乗務員やホテルのレセプションистだった。現在、就職先として内定が出ているのは日本国内の企業であるが、採用にあたっては英語力が評価されたという。現時点で「世界を舞台とする国際的な仕事」に就けたわけではないが、今後のワーク・キャリアに注目したい。

Bはもともと、日本語と母語を使う両国に関係した仕事を目指す「架け橋」型を目指し、首都圏の大学のインドネシア語学科を目指していたが、大学進学は叶わず専門学校に進んだ。専門学校入学後は「お父さんの言葉があったから」ITと外国語を学び続け、Bのバックグラウンドに肯定的な理解を示す専門学校教員の支えによって、ITの技術を身につけた。もともと「架け橋」型や「国際」型を目指していたBだが、進路選択によって「手に職」型に方向が変わったと言えるだろう。

Cは高校生のときから目指していた職である美容師としての就職が決まり、「手に職」型の道を進むことになった。Cの母方の祖母はインドネシアで美容室を営んでいた。渡日前の幼少期に祖母の働く姿を見ており、日本で美容師を目指す一因となったと考えられる。偶然にも就職先の会社が東南アジア進出を目指し、すでにシンガポールに支店を出しており、インドネシアに支店を出す可能性もあるとCが話していた。就職を契機として、日本で身につけた技術を母国インドネシアでの仕事に活かせる可能性が出てきた。こうして、Cには、今井（2008）の5類型に重複して該当する「手に職・架け橋」型の道が見えてきている。

7. まとめと今後の課題

本研究の目的は、複言語コミュニティの子どもたちにどのようなキャリア発達が起きているかについての知見を得ることであった。

ライフ・ステージにおける「学び手」を「子どもが社会に出るまでの準備期間」と

考えると、進路選択はキャリア発達の重要な要因の一つであると考えられる。

大洗コミュニティにおいて、インドネシア語が優位な移民第一世代の親は「理解ある親」のように考えられがちだが、日本語能力が十分でないため、進学や就職についてアドバイスすることができず、その役割は精神的な支えに留まっている。日本語が優位な言語であり、親との意思疎通が十分図れない移民第二世代の子どもたちは、日本人の友だちより、宗教的な結びつきを持つ大洗コミュニティの同世代の者同士で支え合い、教育関係者からのサポートを受けながらキャリア発達を遂げていたことがわかった。

今回の調査協力者3名はこれから、社会の一員としての本格的なワーク・キャリアが始まる。高校卒業後、大洗町から離れて学校に通う者もいたが、いずれも日曜の礼拝には戻ってこられる距離にいた。これまでは、親・友人・宗教というコミュニティの支えを身近に受けることができたが、今後、就職先・配属先によってはコミュニティを離れることもある。そうした場合、彼らがどうキャリア発達を遂げていくか、今後も調査を続けたい。

一方、本研究のPAC分析で用いた刺激文は、周囲の人からのサポートを連想させる内容となっており、調査協力者の学習面や進学先での経験、あるいは進路決定に影響を与えた転機を連想させる内容とはなっていない点が課題として挙げられる。今後は「つながり」、つまり社会関係資本だけでなく、彼らの経験や転機も連想させる、多角的なPAC分析の連想刺激文を考案する必要がある。

他方、近い将来、在留資格「特定技能（2号）」を持つ労働者が家族を帯同することも考えられる。本研究で述べたような複言語コミュニティは今後も生まれ続け、移民第一世代と第二世代の間で起こる言葉の問題は繰り返されると考えられる。こうした状況を鑑み、本研究で得た知見を誰に対してどのように役立てられるか、という点も今後の課題である。

注

注1 大洗町役場によると、同町の外国人住民の在留資格（上位5種類）は以下のとおり。国籍別の集計は行われていない。定住者（32%）、技能実習（29%）、永住者（17%）、特定技能（7%）、日本人の配偶者等（6%）

付記 本研究は、JSPS 科研費 15K02627、19H01272 の助成を受けたものである。

参考文献

茨城県教育委員会（2021）「令和4年度茨城県立高等学校入学者選抜実施細則」,19-20

URL <https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/gakkou/koukou/nyuusi/r4/0927-2/02dl.pdf>

（最終閲覧日 2022年5月10日）

今井貴代子（2008）「「今—ここ」から描かれる将来」『高校を生きるニューカマー』

明石書店, 182-197

奥山和子 (2018) 「キャリア形成を見据えた外国人児童生徒教育の必要性：TEM 分析
を使って」 大學教育研究 vol.26, 9-26

志水宏吉 (2014) 『「つながり格差」が学力格差を生む』 亜紀書房, 121-157

助川泰彦・吹原豊 (2013) 「日本のインドネシア人コミュニティにおける児童生徒の
母語教育に関する予備的調査—家庭とインドネシア人教会の役割に注目して—」
『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 344-349

田巻松雄・Sueyoshi Ana 編著 (2014) 『越境するペルー人—外国人労働者、日本で成
長した若者、「帰国」した子どもたち—』 下野新聞社, 112-145

土田義郎 (2017) 「PAC-assist2」 URL [http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/
lecture/pac-assist.htm](http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm) (最終閲覧日 2022 年 2 月 3 日)

内藤哲雄 (1997) 『PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』 ナカニシ
ヤ出版

中條和光 (2017) 「進路指導」 松田文子・高橋超編著 『改訂 生きる力が育つ生徒指導
と進路指導』 北大路書房, 192-228

平林輝雄 (2001) 「北スラウェシ州, ミナハサにおける地方語とメナド・マレー語」 『長
崎県立大学論集』 35(1), 29-57

吹原豊・助川泰彦 (2012a) 「茨城県東茨城郡大洗町で就労するインドネシア人移住労
働者の生活と日本語習得の実態調査」 『国際社会研究』 創刊号, 43-55

吹原豊・助川泰彦 (2012b) 「移住労働者の子どもたちのバイリンガル化に関する諸
要因の予備的調査—日本のインドネシア人社会における事例—」 『2012 年度日本
語教育学会秋季大会予稿集』, 153-158

文部科学省 (2011) 『高等学校キャリア教育の手引き』, 8-17

URL [https://www.mext.go.jp/a_ menu/shotou/career/1312816.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1312816.htm) (最終閲覧日 2022 年 4
月 9 日)

Tirtosudarmo, Riwanto. (2005) “The making of a Minahasan community in Oarai:

Preliminary research on social institutions of Indonesian migrant workers

in Japan.” *Intercultural Communication Studies* 17, 105–138

(ささき りょうぞう・静岡大学)

(ふきはら ゆたか・福岡女子大学)

(すけがわ やすひこ・東京国際大学)